

B

書

評

K



『明治・大正・昭和の 細菌学者たち —北里柴三郎から藤野恒三郎まで』

著者

国立感染症研究所元所長
竹田美文

竹田美文先生は、腸炎ビブリオ感染症、病原性大腸菌感染症、コレラ、赤痢など、公衆衛生上の影響が大きい消化器系感染症の研究において、広く知られる第一人者である。国立国際医療センター研究所と国立感染症研究所という、新型コロナウイルス感染症パンデミック後に、国立健康危機管理研究機構として統合されたそれぞれの組織の所長をお務めになったご経歴からも、竹田先生のお仕事の重大性が改めて認識され、本分野を牽引してきた存在であると言える。竹田先生に初めてお会いしたのは2014年のモダンメディア通巻700号記念座談会に参加させていただいた時であったが、竹田先生のほか、紺野昌俊先生、そして司会の熊坂一成先生という大先輩方を前に、緊張でほとんど発言できなかったことを懐かしく思い出す。

本書『明治・大正・昭和の細菌学者たち—北里柴三郎から藤野恒三郎まで』は、竹田先生が師と仰ぐ藤野恒三郎先生の著作や、ご自身の過去の雑誌連載をもとに編まれたものである。日本の感染症学・細菌学が、初期にはオランダやドイツに学び、そして明治前期の北里柴三郎先生から昭和後期の藤野恒三郎先生に至るまで、世界的業績を生み出してきた歴史を辿る一冊である。主な登場人物（敬称略）と関連する病原体・感染症を列記してみると、北里柴三郎（破傷風菌、ペスト菌）、志賀潔（赤痢菌）、秦佐八郎（梅毒）、稲田龍吉・井戸泰（レプトスピラ症（ワイル病））、二木謙三ら（鼠咬症スピロヘータ）、野口英世（梅毒、オロヤ熱、黄熱）、大原八郎（野兎病）、長與又郎ら（つつが虫病）、そして藤野恒三郎（腸炎ビブリオ）、である。単に歴史に名を残す先生方の偉人伝ではなく、竹田先生の視点からそれぞれの人物像や研究における系譜、学術的な奮闘、および成果が記されており、歴史好きのみならず、感染症に携わる人であれば誰にとっても読み応えのある内容となっている。

本書に登場する感染症を俯瞰すると、消化器系感染症、性感染症、環境や動物、昆虫が媒介する感染症など、衛生的な環境を作る取り組みや、現代でいう「ワンヘルス」の視点を要する疾患が多く含まれている点に気づかされる。確かに、抗微生物薬の開発によりこれらの感染症に対する治療選択肢は増えた。一方、公衆衛生上の問題は変動しており、日本であれば抗微生物薬乱用による薬剤耐性菌の問題が、医療機関内から市中にも拡大している状態である。

感染症研究の手法は、当時とは比較にならないほど飛躍的に発展している。しかし、そうした技術をもって何をを目指すのかという根源的な問いに対して、本書は一つの示唆を与えてくれる。本書に登場する先生方の情熱と活躍をお手本として感染症に苦しむ人々を助けるためという大きな目的を忘れないようにということである。竹田先生からのこのメッセージを、本書の深部から感じ取ることができる。

順天堂大学大学院医学研究科 臨床病態検査医学 教授
上原由紀

発行：大阪大学出版会 〒 565-0871 大阪府吹田市山田丘 2-7 大阪大学ウエストフロント
定価：本体 2,400 円＋税